エウロパの旅人―建国篇

山田　潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エウロパの旅人―建国篇

【Ｎコード】
Ｎ９７５６Ｚ

【作者名】
山田　潤

【あらすじ】
いよいよ、国の再興が本格派する。丈、雄一郎、正、それぞれのパーティーは生存者を探し出し、復興のパラダイム（規範）を指し示しつつ旅を続ける。また、生存者のコミュニティ同士が連絡を取り合い、技術を共有しようとする動きも見られ始めていた。そんな時、ホモローチのセカンドジェネレーション（第二世代）の脅威が十州道のコミュニティを襲い、新たな闘いの幕が開く。生存者達の運命は、そして被災前、大量に出荷されたバイオ流体緩衝材の行方が明らかにされる。

トリロジー、エウロパの旅人　最終章の予定で連載を始めますが、
展開次第では新章への突入も有り得ます。

いざ、鎌倉

いくら僕が視覚を開放しようと、俯瞰で見ることのできるサイトに捜索能力は及ばない。彼女のお陰で生存者を見つけ出す効率はぐんと上がっていた。また、ドーム建造という具体的な復興プランは持たずとも、あれほどの災禍を生き延びた人々の中にはバイタリティと克己心に富んだ方が多く、身を寄せ合った人々は力を合わせて生活を再建しようとしていた。

そしてコミュニティ同士が連絡を取り合えるようになると、それぞれの技術は離れたコミュニティにも速やかに浸透して行く。医療技術のないコミュニティには医師が派遣され、発電設備が作れないところには電気技師が送られた。労働力のあるコミュニティでは僕達の助力なしでドームの建造が始まっているとも聞いている。これが伊都淵さんの目指す未来だったのだろうか、僕は彼の先見性に痛く感心していた。

外壁を積み上げる段になるとそのコミュニティを後にしていた僕にとって、工事の進捗状況は非常に気になるものだったが、ようやくプロデュースドバイ所教授の脳味噌の使い方にも慣れ、サイトの記憶を投影する――つまり、彼女に見てきてもらった映像を僕も見ることができるようになっていた。手を振る真柴さんや斎藤さん達の姿、佐伯医師があちこちのコミュニティに出張される姿を脳裏に映し出し、僕達の使命が順調に果たされていたことに安堵した。

「あなた方のお陰で、ここの人々も希望を持つことが出来ました」

僕と原田兄弟は、およそ１４００年前になんとか天皇が造ったという大きな寺院跡に居た。政変・飢饉・干ばつ・大震災に天然痘の流行と、苦難の時代に建てられたこの寺院は医療や福祉に熱心だったそうだ。その意思を明確に引き継がれたのか、ここでただひとり命を取り止めた泰然法師だ。彼は存在を否定されていた地下建造物に生存者を集め、軽装だった人々に法衣を与えて暖を取らせ、食料

として凍死した鹿の肉を振舞ったと言う。平時なら言語道断だと責められもしようが、この非常時に於いては素晴らしい判断だったと言えよう。
余談だが僕は結婚する前、日向子とここを訪れたことがある。ポケットに入れておいた鹿せんべいごと尻を齧られズボンを涎でびしょびしょにされた。多くの観光客が居て鹿を追いかけ回す訳にも行かず、いつか復讐してやろうと思っていた。泰然法師は意図せぬままに僕の恨みを晴らしてくれていたのだった。思わず知らず下がる溜飲に、原田兄弟は妙な顔で僕を見つめたものだった。
「いえ、我々は東北のカリスマの命に従って動いているだけですから。如何でしょう、こちらでもドームの建造を考えてはいただけませんか？」
「知恵とお力を拝借出来るなら願ってもないお申し出です。なにせ拙僧は寺のこと以外、何も知りませぬ故」
「なれば、早速有志を募ってバイオ流体の培養にかかりたいと存じます故」
……簡単に仰々しい物言いがうつってしまう辺り、僕はまだ自己が確立されていないようだ。
「じゃあ、その役目は拙者どもが、しかと仰せつかったでござる」
僕の憂慮など歯牙にもかけぬ様子で原田兄弟が言い、彼等は生存者の集まる中室と呼ばれるところへ身体を低くして走って行く。それじゃあ忍者だよ……
「ほっほっほ、楽しい方々ですな」
恐縮する僕をよそに、泰然法師は高らかに笑われた。これが本当の泰然自若ってヤツなのだな。
実のところ、僕は宗教家と呼ばれる人々にあまり良い印象を抱いてはなかった。彼等の説く教義だか教理だかは高尚だが、彼等自身、本当にそれに沿った生活をしているものだろうかという疑問があった。亡くなった人々につけられる名前に値段の差があるのも納得が行かなかった。有り難がる物は目に見えず、聞いててもちんぷん

かんぷんな経文も払う金額で違うと言う。ただ、これもやはり？人？によるのだろう。痴漢行為をする警官も居れば、生徒に手を出す(僕はやってない）教師だって居る。僧侶にせよ、一般人にせよ、悪いヤツは悪い。良い人は良いのだな、と思いました。何だか小学生の作文みたいになってしまった……

　そんなこんなで僕達の次の仕事はこの寺院跡になった。解体された鹿の内臓がサイトの御馳走となり、犬や猫を掘り返す必要もない。山ほどの凍った鹿が敷地内に埋もれていた。

　このコミュニティの住人は参道で土産物屋や食堂を営んでおられた方々が多く、女性比率と年齢層が高めだ。ご主人は五十代、六十代といったところで、二十代は土産物屋の看板娘だった女性と駐車料金の徴収係だった同じく女性がひとり、倒れた大仏の隙間に潜り込んで難を逃れた観光客の男性がひとりの都合三名。警備員の格好をした男性が二人居たが、どちらも四十代だった。これでドーム建造が進むだろうか、という懸念が僕にはあった。

「へーえ、そんなんできるんやあ」

「せやなあ、穴ぐらに住むよか、そっちのほうがええなあ」

「カリスマはんもえらいもん、思いつきよんなあ」

　関西弁でそう言われると、何やら危機感が遠ざかって行く気がした。だが、和んでいてドーム建造は始まらない。食料がふんだんにあったことから、僕はあることを思いつく。

「是非お力をお借りしたいんですが」

――了解、二人送り込もう。

　真柴さんは労働力の派遣を快諾してくれた。生まれ変わったように、勤勉になった中島、遠藤の両名を派遣してくれると言う。

――ここには若い男性は少ないが、病院の技師だった二人がやる気になっている。ただ、我々には交通手段がない。

「迎えにあがります」

　佐伯医師の居るコミュニティからもふたりの男性を借り出す約束を取り付けた。

「こういう土地柄ですからな、重機リースの会社となると街の方まで行かんと……あっ、ちょっと待ってください。法華堂を工事しておったはずです。あそこに建設業者がぎょうさんの重機を持ち込んでおりましたな」

法師の話を聞いた僕達は氷の丘陵地帯へと向かう。ショベルカーでも見つかれば大幅な労力の軽減が図れるというものだ。現場では都合良く数台の重機とダンプカーが折り重なっていてくれたが、転倒したそれらのバッテリーから電解液が流れ出しておりスタータは回らない。大型のディーゼル発電機もあったのでなんとか持って帰れないものか……と、唇を噛んで考える僕に海地が言った。

「押しがけすれば？」

そうだっ！　何故、それに気づかなかったのだろう。丘陵地を上ってきた訳だから下り坂がある。そして僕に馬鹿力があることをすっかり忘れていた。えらい、えらい、と風真に頭を撫でられた海地は迷惑そうな顔をしていたが、僕は上機嫌となっていた。

「押すぞ、ギアは3速ぐらいに入れておいて、勢いがついたらクラッチを離すんだ」

「あいよー」

ショベルカーの運転席には風真まで乗り込んでいる。どっちか手伝ってくれたらどうなんだよ。

9．02以来、二ヶ月半ほど火を入れられることのなかったエンジンは、なかなか息を吹き返してくれない。それもそのはず、氷の坂道には一切の路面抵抗がなく、駆動軸側からクランクシャフトを回してくれるだけの力が得られないのだ。かかりかけたエンジンが雄叫びを上げる前にショベルカーはすーっと滑って行ってしまう。結局、平坦路を押す羽目となった。キャタピラで走行する重機だ、僕の馬鹿力をもってしても時速１０ｋｍまで上げるのは容易ではない。数百メートル押した辺りで、ようやくエンジンがかかり、僕は思いっきり排気ガスを吸い込んでしまった。

「ここで待ってるから二人で発電機を取ってきてくれよ、重機の取

り扱いは慣れたもんだろ？」
四肢は梓先生ご自慢の品でも心臓はオリジナルだ。僕の心臓と呼吸器系は音を上げそうになっていた。へたりこんで力なく声を上げる僕に車上の二人は楽しそうに返してくる。
「りょーかーい」
いい気なもんだ……
疲労困憊して寺院跡に帰り着いた僕に、真柴さんから連絡が入った。
——二人は先ほど送り出した。ところで古都府は知っているかい？あそこの病院とコンベンションホールに２０名以上の生存者が居るそうなんだ。短波無線で連絡が取れた。氷のドーム建造に興味を持ってくれている、なんとかして胚とトコログリアを届けてやることはできないだろうか？　培養が済み次第、我々が建造の手伝いに出向く。
頼もしい言葉だった。真柴さんや佐伯医師のような人々が、きっとどこかに生き残っている。いまは孤立していても、このネットワークは必ず繋がる日が来るだろう。そしてその時こそ、日本再興の日になるはずだ。
「サイトに頼んでみます」
伝説では赤ん坊をさらうとまで言われたイヌワシのサイトだ。５００ミリグラム容器を数個運ぶぐらい雑作もないだろう。伊都淵さんの掲げる日本再建プロジェクトは、いま間違いなく独立独歩の道を歩み出していた。

「スマートグリッド……ですか？」
石井の提案に、作業の手を止めた雄一郎が聞き返す。
「ええ、今のところ風が止む心配はありませんが、東北のカリスマが言われる通り、再度の地軸ズレが起きた時、この場所が安定した風力を得られるとも限りません。ガスタービン発電と太陽光発電、バイナリ地熱発電も合せて電力の安定化を図りたいと思います。余乗分は新たに発見されたコミュニティに回せるよう、送電設備も作って行きたいと考えています。作業を終えても電力班はドーム建造に回さず、そのまま発電プラントの構築に就かせたいのですがどうでしょう、許可をいただけませんか？」
勤勉な労働力の多いこのコミュニティのドーム建造作業は順調で、既に外壁の積み上げにかかっていた。地下住居もあり、住民全員がトコログリアの接種を済ませている。一日や二日の遅れが彼等の生命を脅かすことにはならないだろうとの見通しが雄一郎にはあった。
「私に許可を求める必要はありません。あなた方が他の生存者のことを考えていただけるのはありがたいです。どこにも技術者が残っておられる保証はありません。是非、そちらを進めて下さい」
何年か前、原発事故で出た放射性物質を含む廃棄物の受け入れを拒否した自治体があったことを雄一郎は思い出していた。?頑張ろう東北??日本はひとつ?の美辞麗句は、危機感が足元に及んだ途端?ふるさとを放射性物質から守ろう??子供を放射性物質から守ろう?と、すり替えられていた。物ばかりが溢れ、痛みを分け合おうとする気持ちをなくしてしまったこの国で、教団時代、周辺住民から蛇蝎の如く忌避されていた彼等が、そんな申し出をしてくれたことが雄一郎は嬉しかった。
「良かった！　早速、中川さんにも伝えてきます。忙しくなるぞー」
石井が駆け出して行く。ドームの基礎を囲むように設置された風

車群に向かって行く石井の姿に、一ヶ月前のひ弱だったデクの面影はない。
「大した変化ですね」
榊が肩を並べてきた。
「日常の小さな躓きが、彼等に魔の時を呼び込ませ、そこにつけ込んだ連中にいいように利用されていただけなんだろうな。誰しもが彼等のようになってしまう可能性はあった。自分で考える力を取り戻した彼等にもう心配はない。そろそろ生存者捜索に戻る時期なのかも知れない」
「去るとなると案外名残惜しいもんですね」
すっと背後に立った井上が感慨深げな声で言った。
「ああ。だが、そうも言ってはおられまい。今夜にでも話すとしよう」

「えっ！　もう行かれてしまうんですか？」
石井が驚いたように席を立つ。その声に夕食のテーブルに着いた全員の視線が注がれた。
「鈴木さん達が、ここを離れられると言われたのよ」
石井の右隣に居た乾という中年女性が状況を補足して伝える。よく通る声だった。
「他のパーティーは既に複数のドーム建造に携わっており、完成したものもあると聞いています。競争意識はありませんがトコログリアの残量も心細くなってきました。補充に戻ることにでもなれば、遠回りをして救える命を救えなくなる場合だってあるでしょう。出発を考えたのは、そのせいでもあるんです」
「でも……鈴木さん達に教わりたいことが、まだまだたくさんあるんです」
「我々の都合で引き止める訳には行かないよ」
口をへの字に結んだ石井に、隣に座った中川が肩に手を置いて言った。この二人がコミュニティのリーダー格となっていた。

「私に教えられることなど何もありません。あなた方は人を思いやる気持ちをお持ちですし、住民の皆さん全員が自分のなすべきことを知り、それに打ち込んでおられます。我々が皆さんから学ばせていただいているくらいです。なあ」

同意を求められた榊と井上が厳かに頷く。犬達の世話をしてくれていた少女が雄一郎のテーブルに歩み寄ってきた。トコログリアの接種を最初に受けたリエと呼ばれている娘だ。彼女は震える声で言った。

「いつかまた、きっと逢えますよね」

「君が勇気を出してトコログリアの接種を受けてくれたお陰で皆さんがこうしていられる。ありがとう」

雄一郎が立って長く伸びたテーブルに座った面々を見渡す。屋外で監視にあたっている数名を除く住民全員が揃っていた。

「我々は、あなた方をひとりとして忘れることはありません。いつか全ての生存者が安心して生活出来るようになった時、我々はもう一度ここを訪ねたいと思います。立派なドームを、発電プラントを作り上げて下さい。困った時には仲間の誰かが必ず駆けつけるようにします」

リエは雄一郎の背中に顔を埋めて泣きじゃくっていた。井上がその背中をさする。まばらに沸き起こった拍手がスタンディングオベーションに変わっていった

The next opponemt（次なる敵）

「アーク……ですか？」
恒例となった定時連絡で伊都淵さんが言った。
――そうだ、Ａ・Ｒ・Ｋ　氷のドームって呼び方はどうも個性に欠ける。ノアの箱舟はゴフェルの木で作られたんだ？　ゴフェル、ゴエル、コーリ、氷　ばんざーい！　ばんざーい！
……大丈夫か、このオヤジ。依子さんが無事に男の子を出産されて、どこかのタガが外れてしまったのではないだろうか。勿論、能力に秀でたおふたりにお子さんが産まれたのは喜ばしいことだ。その子が成長すれば僕のような臨時雇いへの依存度も減り、真由美さんとの家庭を築ける日も遠からず訪れるはず。氷で出来た住居でも、団欒で温かい家庭を。
「では、バイオ流体緩衝材はどう呼べばいいのでしょう」
長ったらしいので？赤いヤツ？で済ませていたが、ドームの愛称を考えていた伊都淵さんなら、きっと素敵なネーミングを思いついていたに違いない、と僕が訊ねる。
――えっ？　あっ、うーん、それは……
しばし間があった。
――？赤いヤツ？でいいんじゃないのか？
考えてねえのか、このオヤジは……
――そうか、その田下氏は、おそらく呼吸器系の疾患があったのだろうな。Ｐ３００Ａが免疫細胞を活性化させることはわかっていても、それに必要な投薬量も効果の個体差も明確にはなっていない。あの時、伊都淵が頭を開かせていてくれればな――もう少し公共精神に富んだ男だったなら、その人も救えたのかも知れないな。
これは所教授の声だ。杜都市の親機に音声会議装置を繋いだため、定時連絡は衛星電話ミーティングに姿を変えていた。つまり端末があればどこからでも参加者全員の声が聴けるようになった訳だ。

――こらっ！　所、お前は諦めたって言ってたじゃないか。パパになって上機嫌な俺に水を差すようなことというな。
――ええ、あの人が居なければ、我々もどうなっていたか……ドームの建造は順調です。ここには設備も整ってますし、住民も勤勉な方々ばかりです。
　これは雄さんの声だ、カルト集団にとっつかまって、随分と酷い目に遭わされたらしい。そして伊都淵さんのクレームはスルーされていた。
――とにかく、無事で良かった。そこのド……アーク建造は順調に進んでいるのか？　雄のことが心配で仕方ない人が、ここにいる。元気な声を聞かせてやれよ。
　中ノ原市の声は誠さんに代わっていた。雄さんのことが心配で仕方ない？　誰だろう……
――亜希子です。ご無事でなによりでした。
――いえ、藤井さんはそこの生活に慣れましたか？
なんだよ、いつの間に雄さんたら彼女をこしらえてたんだ。しかも女性が『アキコです』って言ってんだから、もうちょいフランクに話しかけてやればいいものを――相変わらずの堅物だな、僕が手本を見せてやろう。
「あのう……誠さん、真由美さんはそこに居ないんですか？」
――ああ、具合が悪くて休んでる。タケ坊のせいだぞ。
　僕のせい？　なんで？　所教授と誠さんの含み笑いが聞こえてきた。
――悪阻だよ。梓が診たから間違いない。
　えーっ！　確かにあの時、真由美さんは『ここにあなたの分身がいる』とは言ったが――えっ？　まさか……マジで？　ばんざーいっ！　――って、僕も伊都淵さんレベルだ……
――やるじゃねえか、この百発百中男め、嫁さんを亡くしてどれだけも経ってないくせによお。
　……。この混ぜ返しはターちゃんだった。

――では、本題に入ろう。現在建造中のものを入れ、ド……アークの数は23、みっつのパーティーだけではこうは行かなかっただろう。生存者が新たな生存者を発見し、知恵と技術を共有し合う。短波無線とサイトの活躍も非常に有効だったな。残念ながら、ド……アークの建造総数は300~400に下方修正せねばならないが、コミュニティー同士の連携が顕著になっているようだ。持つものが、持たざるものへ。労力の足りない所へは労力を、医師が必要なド……アークには医師をと、みんなが助け合っている姿は胸を打つものがある。

　スルーされ続けた伊都淵さんが、急に畏まって話し始めた。彼の言うとおり、真柴さんのような方々があちこちに居られたのだろう、これも喜ばしいことだ。ただ、命名した伊都淵さんでさえ完全には?氷のドーム、イコール、アーク?とはなっていないようだった。

――丈君が最初に建造に手を貸したドームではクローラも作り上げたそうだな。

「ええ、電子機器に詳しい女性がいらしたんです。リーダー格の真柴さんって方は機械工作が得意だったようで、僕が見つけてきた軽トラックを伊都淵さんの設計通りに作られたそうです。防護柵も作っていただきました」

――そうやって移動手段を手に入れることが出来れば、更にアーク間の交流も広まってゆくはずだ。

――でもさあ、あっちに二人、こっちに三人って感じで生存者が見つかる俺のパーティーでは既存のド……アークに収容するパターンが多いんだ。なにせお年寄りが多い地域だからな。

　ターちゃんが言った。僕達もここに来る途中、四人の女性を見つけていたが、そこにド……アークを建造しろとはとても言えず、佐伯先生のところに身を寄せてもらっていた。

――それもやむを得ない。お年寄りでなくともコミュニティの人数が少なければド……アーク建造は無理だ。そういった場合には既存のアークで引き取るしかない。そしてそのアークが満員になれば、

新しいものを建てればいい。ただ、全てのアーク建造に我々が力を貸すというのも良くないように思え始めた。

——パラダイムを示した後は、ある程度人々の自主性に任せようと言うのだな。

所教授が訊ねる。

——ああ、反対か？

——いや、お前の言う通りかも知れん。なんでもかんでも人に任せるのが習い性になってもいけない。鈴木君、トコログリアの残量は？

——１０瓶を切っています。

——本田君、小野木君は？

——似たようなもんかな……

「僕は、えっと……１４瓶の残りです」

実はまだ１８瓶残っている。決してサボっていたわけではないが、残量が一番多かったことに気が引けてサバを読んでしまったのだ。

——川崎君にクローラで届けてもらおうと思っていたが、そういうことなら一度、帰還するのもいいだろう。君達にも休暇が必要だ。休暇！　僕は飛び上がらんばかりに喜んだ。中ノ原市を経って二ヶ月半、それでもう真由美さんに再会できるなんて。

——ところで伊都淵、それはお前の発案なのか？

少し間があって伊都淵さんが答えた。

——……いや、カジさんだ。だが、俺もそれもいいかなと思ってたところだったし……

——だろうな、お前のような甘い男が、そんなことを言い出すはずがない。俺は最初から人々の自主性を重んじるべきだと思っていた。個々が強くならねばならんのだ、特にこんな世界では。

——鎮静の見られる今だから言えることだろう、それは。厳しいばかりでは人々も途方に暮れていたはずだぞ。それに、そう思ってたなら最初から言えよ。カジさんの発案だから賛成だって？　さっきから気分の悪いヤツだな、お前は。

——お前は昔から弱者に甘すぎるんだ、それが小さな新大脳皮質の

せいかどうかはわからんがな。
――あっ！　この野郎、みんなが聞いてる前でそれをいうか。お前が昔、梓、梓ってボロボロ泣いたのを黙ってやってるのに（P３００A参照）
――泣いてなどおらん！
――いいや、泣いたねっ、おんおん泣いた。
――くっ……もう、杜都市にトコログリアは送らんからな。
――へっへーだ、成分構成さえわかれば、どれだけでも作れますよーだっ！
子供か、このふたりは……誰もなにも言わないところをみると、みんなも呆れ返っていたのだろう。
――あたっ！
――っつう……何をする
パチンと音がして二人の声が上がった。これはおそらく業を煮やした依子さんと梓先生二人の頭でも叩いたのだろう、いい気味だ。その時、どの回線でかはわからなきが、けたたましい音で警報が鳴り出した。
――誰のところだ？
――どうやら、ここみたいだ。
警報はターちゃんと村山さんが担当する十州道のコミュニティで上がっていたようだった。
――侵入者あり！　通信、切りますっ！
子供の喧嘩みたいなものを交えながらも和気藹々と進んでいた衛星電話ミーティングに緊張感が漲っていた。

「なんだ、ありゃあ……」
　正があんぐりと口を開ける。監視用モニタに映し出されたものはホモローチよりひと回りデカく、全身を体毛が覆っている。異様に長い腕の下に節足は生えておらず、障害物を無造作に払いのけて前進してくる様は、かなりの膂力を感じさせる。ざっと数えただけでも五十体はいそうだ。隣でモニタを眺めていた村山が声を上げた。
「あれもホモローチなのか？　新沼君、音波発振器の用意を」
　人間の聴覚では認識不可能な音波がアークに取り付けられたスピーカから発せられた。
「効かないっ！　どうしよう、ムラさん」
　モニタを眺めていた新沼が村山を振り返る異形の集団はホモローチ対策として植えたハーブも踏みつけて前身してくる。
「夜半で屋外に出ている者が居なかったのが幸いだ。防護壁を下ろそう」
「俺が！」と、正がスリングの解除に向かった。
　丈の発案で採用された防護壁は、天井下部に張り廻らせたキャットウォークに吊り下げられており、スリングによるロックを解除することによって瞬時に氷のシャッターが引き下ろされる仕組みになっている。ズシンと重い音がして全ての入り口が閉じられた。
「ふう、間に合ったみたいだな。しかし、なんなんだ、こいつ等。ホモローチじゃないのかよ」
　会議室に戻った正は防護壁を押したり、手にしたオール状のようなもので叩いたりする姿を眺めて言った。氷で出来たそれに手を掛けられるような所はなく１８０ｋｇのバラストがシャッターを閉じる力に変換されている。丈か雄一郎でもなければ持ち上げられるものではない。すると今度は外壁をよじ登ろうとしてきた。こういった襲撃を想定していた訳ではないが、何度も水をかけては鏡の如き

滑らかさに仕上げられた氷の曲面だった。氷壁に挑む登山家並みの装備がなければ歯が——いや、爪が立たない。助走をつけ外壁に飛び付こうとする異形の者も居たが、一秒たりとて氷の曲面に取りついては居られなかった。音声はないが滑り落ちては歯を剥き出して唸っているようだ。

「ホモローチとは違うようだな、他のアークは大丈夫なんだろうか？　杜都市を呼んでみよう」

十州班からの連絡を待っていたのか、伊都淵がすぐにコールに応じた。現況と異形の者の風体を村山が告げる。

——ふむ、体毛があって腕が長いか——連中、？乗り換え？を覚えたようだな。さもなければ氷が溶けてしまったこの時期、海を渡ってはこれまい。

「乗り換え……ですか？」

——そいつを見ていない現状では想像の域を越えないが、おそらく人間に遺伝子導入する前に、オランウータンか何かとでも掛け合わせたんじゃないだろうか。トランスジェニックならぬ、トランスファージェニックだから？乗り換え？と言ったんだ。俺の予想通りならホモローチのセカンドジェネレーション（第二世代）ってとこだろう。こうなる以前、台湾に密輸されたオランウータンを中国が引き取って吉林省に放したという報道があった。もしや、とは思っていたんだがな。

「すると、こいつ等もやっぱしメイド・イン・チャイナな訳？」

正が送話口に顔を寄せる。

——オールのような物を持っていると言っただろう。ボートで海を渡ってきたのだとすれば、やはりアジア圏からのお客さんだろうな。となると、日本海側全域がやばいぞ。

「お客なんて品の良さそうな連中じゃないぜ、こいつ等は。撃退するいい方法を思いつくのがタッキーの役目だろ？　ハーブも音波も効かないんだ、なにか考えてくれよ」

東北のカリスマと呼ばれる伊都淵も、東日本大震災のボランティ

アに励んだ時代からずっと一緒だった正にかかっては形無しだ（？錯覚の閃光？参照）。
――タッキーは止めろってば。顔の横に出っ張りのあるのは居ないか？
「ちょっと待って――居た、居た、後ろのほうで指示を出しているみたいだ。こいつ等、前のより一段と統制がとれてやがる」
――おそらく、そいつがボスだ。しかし、脱線した高速鉄道の車両を埋めちまう連中だから犬に近いのかと思っていたが、よりによってオランウータンとはな……
「あははは――って笑い事じゃないってーの！　どうすればいいんだよ」
――待ってくれ、考えてみる。
数秒あって伊都淵の声が返ってくる。
――応急措置だ、猿の嫌う音波を探してみろ。音波発生装置の出力を１００デシベルに固定して、スイッチのオンオフを繰り返せ、手動でＰＷＭ制御をするのと同じことだ。奴等に変化が見られる周波数域をモニタで見つけて固定してみてくれ。
「わかった、やってみる」
正が答えると同時に村山が作業に取り掛かる。
「あっ！　撤退し始めたぞ」
――よし、その周波数域で固定だ。奴等の動きはどうだ？
「えっと、５０ｍぐらい後退したところで様子を伺ってる感じかな。こいつ等も頭が破裂して死んでくれたりはしないもんかね」
――ホモローチほど短命ではないにせよ、自然の摂理に背く遺伝子の掛け合わせである以上、長くは生きられまいとは思うが……」
「思うが、なんでしょう？」
杜都市でも老人ばかりのシェルターをホモローチに襲われ多くの犠牲者を出した。そこを担当していた村山に忌まわしい記憶が蘇る。
――村山君か、先ず十州道全てのアークとシェルターに連絡を取って、襲撃の危険と周波数域を伝えてくれ。オランウータンは異種交

配をする、従ってサイトカイン・ストームへの耐性も強いと見るべきだ。奴等が死滅するのを待つだけの体力が全てのコミュニティにあればいい。そうでなければ、こちらから打って出る必要も生じる。勿論そうなれば応援には行くが、すくなくとも2~3日はかかる。

「それまでは様子を見ながら耐え忍ぶしかない、ということですか」

――そうだ、所達にも相談してみる。奴等に動きがあれば連絡をくれ。

通話を終えた伊都淵は、すぐに丈を呼んで状況を説明した。

――すまないが、サイトの力を借りてもらえないだろうか。十州道を襲ったのがホモローチの第二世代なのかどうか、奴等の上陸規模、他の日本海側はどうなのか、我々が足を運ぶより早くサイトなら見てこられるはずだ。ここのところ通信波に気になるノイズも入ってきている。君が担当するコミュニティにも、至急連絡をとってくれ。

「案じていたことが起きてしまいましたね」

――ああ、そのためにアークの建造を急がせたんだが……襲われたのが完成したコミュニティだったのが不幸中の幸いだな。君の発案の氷のシャッターも役に立った。

「持ち堪えることができるのでしょうか？　サイトカイン・ストームへの耐性も高いとすれば……」

――我々全員で本田君達の救助に向かうことになるかもしれんな。ここ数日、通信に気になるノイズもはいってきている。

「ノイズ……ですか？　我々の知る以外の生存者なのでは？」

――信号が断続的で解読には至ってないが、その可能性は高い。外国からのものかもしれない。

「そうですか、偵察の件は明日にでも、サイトに話してみます」

――頼んだぞ。事態は一刻を争う。そちらも充分、注意するようにな。

「わかりました」

　この二ヶ月半、世界はまさに凍りついたまま、その冷たい表情を変えてなかった。そこへ突如としてあらわれた変化は、決して僕達を喜ばせるものではなかった。

「どうしたん？　難しい顔して」

　伊都淵さんとの通信を終えて部屋に戻った僕に海地が訊ねてきた。

「ホモローチのセカンドジェネレーションが十州道に現れたらしい。確認されたのはまだ五十体ほどだが、知恵も力も以前のものを凌駕するだろうと、伊都淵さんは言ってた」

「げっ！　本当かよ。ヤバいじゃん」

「前のヤツみたいに、放っといても頭がパカンと割れて死んじゃうんじゃないの？」

　風真自身、その発言が希望的観測であることはわかっているよう

な顔だった。さもなければ僕がこんな辛気臭い顔をしているはずはない。
「かもしれないが、最悪の事態を想定するのが危機管理の鉄則だ。防護柵を張ってくる」
携帯電話のカメラやバックアイカメラにクリアランスソナー、カーナビのモニタなど、僕が見つけてきた有り合わせの物で成美さんが作り上げたそれは、境界を超えてくる侵入者を映像と音声で知らせてくれる。あの人の電子機器に関する知識は伊都淵さんや依子さん並みではないのだろうかと僕は感心したものだった。
「俺達も行こうか？」
「十州道にあらわれたのが、こっちにも来てない保証はない。日本海側へ漂着したのなら正反対に位置するこちらまで来るには時間もかかるだろうが、注意するに越したことはないだろうな。君達はここに残って、真柴さんと佐伯先生への連絡を頼む。外に出る時は充分注意するんだぞ」
海地に後顧を託す。不安気に地下の天井を見上げる風真に気休めでも言ってやりたいところだが、詳細がわからない以上、楽観視は出来ない。赤いショートコートを掴んで与えられていた部屋を出ると、用足しにでも出ておられたのか階段を下りてくる泰然法師と鉢合わせした。
「どうなさいました？　こんな時間に」
切迫した僕の表情に気分転換の散歩でもないな、と判断されたようだ。
「防護柵を張ってこようと思いまして」
「防護柵？　侵入者の可能性でもあるのですか？」
僕は真実を告げるべきかどうか迷った。お年寄りの多いこのコミュニティだ。住人に余計な不安を抱かせたくなかったのだ。だが、生き抜くためには勇気が必要で、それを生み出すのは老若男女変わることなく覚悟だ。僕は伊都淵さんの予測を述べた。
「あれの第二世代が十州道に上陸したそうです。情報が少ないため

推測の範疇を越えてはませんが、東北のカリスマの予想通りなら、少々厄介なことになりそうなんです」
サイトカイン・ストーム以来、何度もブリザードは吹き荒れ、ホモローチの死骸は氷で覆い尽くされてはいたが、ここにも奴等が侵入した形跡は残っており、数名の犠牲者も出していると泰然法師は語られていた。
「ふむ、あれが進化していると予想された訳ですか……だとすれば確かに困ったことになるかも知れませんな、拙僧も手伝いましょう」
宗教家故か、はたまた泰然法師の素養によるものか彼の理解は早い。だが70歳にもなろうかという法師を、例えミクログリアの接種を済ませているとは言え、深夜に、しかも氷点下の屋外での作業に駆り出すような真似は出来ない。
「いいえ、ひとりで充分です」
遠慮する僕に法師はおっしゃった。
「我々は仏様の立場で考え、行動することを人々に説いてきました。その私が身をもって教えを体現できる機会など、そう多くはありません。この老体にも力にならせてやって下さいませんか」
そうまで言われては仕方ない。僕は法師の申し出を有り難く受けることにした。
外へ出た僕達は、横倒しになったまま凍りついて小山のようになってしまった大仏像を起点に防護柵の設置を始める。ハンマも使わずに片手で杭を打ち込んでゆく様を感心して見ておられた法師に通信ケーブルの端を持っていてもらい次の杭を打ち込んでは繋いで行く。地下の居住区をぐるりと囲んでしまいたかったが、センサーとカメラの着いたステンレス製の杭の数は限られている。50m間隔で打ち込んでゆくそれらに出来るだけ死角をつくらないようにするのが、いま出来る精一杯の対策だった。
「完了です。住民の皆さんへの説明は法師様にお任せします」
「法師様などと呼ばれるのは面映ゆいだけでしてな、泰然で結構です。如何でしょう、天狗様の視察が済んで、もう少し状況がはっき

りしてから説明するのではいけませんかな。」
法師はサイトのことを？天狗様？と呼ばれていた。
「お任せすると言った以上、異存はありません。ただ、夜間……白夜のこの時期、昼間も夜もありませんが、屋外での単独行動は禁止、若しくは必ず僕が付き添います。寝てたら叩き起してください。出来ればその……」
「必ず例の鉄砲を持たせて、そういうことですな」
「……ええ」
佐伯医師の居た病院地下でスタンガンを見つけ、成美さんの知恵を拝借してワイヤー針が多数発射出来るバリケードタイプに改造していた。本来のスタンガンには映画やドラマのように人を気絶させるほどの効果はない。そのため出力を上げ、マンイーターやホモローチ鎮圧用にと、このコミュニティに配備した。ただ、外に出られる人々が、それを手にしていた記憶はない。
しんと静まり返った白夜の空の下、僕と泰然法師は作業を終えて地下の居住区に戻る。階段を下りたところには原田兄弟が待っており、他のコミュニティへの連絡が済んだことを伝えてきた。
「休暇どころじゃなくなりそうじゃん」
「そうだな……何れにせよ、ここはまだ基礎工事にすらかかれていない。中ノ原に戻るとしても半月は先になるだろう」

Reconnaissance（偵察）

《頼めるかい？》
　夜が明けると、僕は早速サイトを呼んだ。伊都淵さんの依頼を伝えるためだ。
《オヤスイゴヨウヨ》
《すまない、まず古都府にこの包みを落としてきて欲しい、座標はここ。次に十州道に飛んで海岸線の様子とアークを包囲している連中を視覚に焼き付けて杜都市に寄ってもらいたい。君のイメージを読み取れる人が居る》
　真柴さんから依頼のあったトコログリアは古都府のコミュニティに１８瓶と鼻腔用カテーテルを届ける予定で、サイトの足にくくりつける。彼女の鋭い爪でパッケージが破損することのないよう、厳重に梱包してある。
《カイガンゾイヲトベバ、ホカノチイキノヨウスモワカルワネ》
《ああ、でもそんなに一度に頼み事をするのは申し訳ない》
《イイノヨ、アノコタチノタメデモアルンデショウ》
　サイトがクイッと原田兄弟に首を振る。普段は真柴さんから譲り受けたかっこいいヘルメットを被っている彼等だったが、それを脱いだ頭は丸刈りが少し伸びた風（兄弟でバリカンで刈り合っていた）で、鳥の雛のように見えなくもない。しかもサイトは鳥だ、動くものへの反応は極めて機敏で的確だが所謂鳥目だった。彼女の行き場を失った母性は原田兄弟へと無理矢理向けられていた。何を言われているかわからない二人は僕とサイトをキョトンとした顔で見返してくる。
《くれぐれも無理はしないようにな》
《マカセテオイテ》
　数度羽ばたいて高度を安定させたサイトは、そのまま北の空へと向かって飛び立って行った。

「天狗様は、お出掛けになられたようですな」
地下居住区から泰然法師が姿をあらわして、小さくなって行くサイトの姿を仰ぎ見る。
「ええ、彼女が居なければ、ここを見つけることも容易ではなかったでしょうし、こういった調査もできなかったはずです」
「良いお供がついてくれるのは、小野木さんの徳の高さの証なのかもしれませんな」
傲慢な犬、母性本能丸出しの熊、そして手先の器用な原田兄弟と、確かに僕はパーティーの仲間に恵まれている。だが、未だ僕の使命感は独り立ちの気配を見せず、伊都淵さんに教えられたことを愚直に守るだけ、ターちゃんや雄さんに負けじと頑張るだけ、そんな僕に人徳などといったものがありっこない。
「防護柵を見てきます。海地、風真！　裏手を頼む」
「あいよっ！」
原田兄弟に声を掛け、僕はその場を逃げ出した。
「どうだった？」
「侵入者の形跡はないよ、モニタにも兄ちゃんと交代で張り付いてたけど何も映らなかったし」
欠伸混じりの声で風真が答えてくる。睡眠時間を削って、ほっそい目を光らせていてくれたのだろう。
そして僕が点検した箇所も同様に異常ナシ、ホモローチ第二世代の脅威は、まだこのコミュニティまで迫ってはいないようだ。基礎工事にはいるまで、もう4~5日はかかる。発ったばかりのサイトの帰還と報告が早くも待ち遠しく感じられていた。そして、こちらも夜を徹してここを目指してくれたようだ。氷原の彼方にクローラの車影が見えてくる。僕は大きく手を振った。
「ムラさん、あれ、タケ坊が言ってたサイトじゃないのか？」
正の言葉に村山がモニタを覗き込む。大きな鳥の飛翔する姿が映っていた。かなりの低空飛行だが、アークに意識（連中にそういっ

たものがあるならば）を捉えられた異形の者達は気づいてない。
「そうみたいだな、様子を見にきてくれたんだろうか？」
イヌワシは南極圏には生息しない。殆どの鳥類が９．０２で死滅し、残った種も氷の溶けかけた地域へと移動してしまった今、正と村山の希望的観測は間違ってはいなかった。サイトは丈の許を発って、たった数分で古都府のコミュニティに使いを済ませ、たった一日半で十州道のアークへとたどり着いていた。異形の集団の上で優雅に弧を描いていたサイトは、しばらくするとやってきた南の空に飛翔していった。
「ああっ！　帰っちまうぞ」
「サイトだけで、なんとかなるものでもないだろう。状況を知らせてくれるのではないだろうか。伊都淵さんの指示を待とう」
音波発振器のお陰で包囲網を縮められることはなかったが、依然５０ｍほどの間隔でアークを取り囲む異形の脅威は去っていない。このまま包囲が続くとなると……正を宥める側に回った村山だったが、拭えども落ちない染みのような不安が胸中に広がって行くのを感じずには居られない。
その直後、何気なく見やったモニタに、バタバタと倒れてゆく異形の姿が映し出される。
「見ろっ！」
村山の声に正が視線を移す。離れていた新沼も戻って二人の間から顔を覗かせた。
「これって……例のサイトカイン・ストームなのかな？　伊都淵さんは第一世代より耐性があるっていってなかったっけ」
「違う、これは……銃撃だ」
新沼の問い掛けに答えたのは固唾を呑んで見守っていた村山だった。異形の者達は、胸から頭部から体液を飛び散らせて倒れて行く。
「銃撃？　杜都市のアークに火器はなかったぜ。それに救援に駆けつけてくれたにしては早すぎる。一体、誰が……」
散り散りとなって逃げ惑う異形の集団の間から姿を現したのは全

身白づくめの一団だった。彼等が手にした小銃らしきものにはサプレッサーでも装着されているのか、マズルファイアも見えなければ、聞こえていいはずの発射音も届いてこない。

「誰なんだ、彼等は……外国の軍隊なのか？」

射殺されるか逃げたかで、モニタに映っていた異形のバリケードは消え去っていた。

伊都淵からの緊急連絡は雄一郎から石井・中川の両名に伝えられ、続いてコミュニティの全員へと速やかに行き渡っていた。そのせいかパーティーの出発を見送る人々の表情も幾分硬く感じられる。
「ここも襲撃の危険があるのでしょうか？」
惜別の感傷を上回る危機感が石井の表情にはある。雄一郎は努めて主観を排除しつつ危機管理の必要性を唱えた。
「直接接触のない現在では、なんとも言えません。ただ、連中がホモローチの第二世代であるとするなら、友好的な態度は望めないと思ったほうがよいでしょう。空からの調査が済めば、もう少しハッキリしたことをお伝えできると思います。それまでは、いつでも地下に逃げ込めるような体制で作業を進めていてください」
第一世代の目的が食料という資源調達だったことからも楽観視はできない。いま一番欲しい情報は、脅威との距離、残された時間だった。
「これがスマートグリッドのシステム概要と回路図です。他のコミュニティでもお役立て下さい」
「ありがとうございます」
石井からメモリーカードを受け取った雄一郎は、それをそのまま井上に託す。
「これは誠に渡してくれ。俺は残ったトコログリアを持って杜都市へ向かう。ふたりは橇で中ノ原に戻り、その後のことは所教授の指示を仰いで欲しい。くれぐれも注意するんだぞ」
「大丈夫ですか、ひとりで」
「ああ。頭は冴え、全身に力が漲っているように感じられる。心配するな、俺は逃げ足が速いんだ」
雄一郎らしからぬ軽口が、却って井上と榊の緊張を煽った。
「お気をつけて」

「ありがとう、君達もな」
かつてラウンド開始のゴングに反応した心身は、いまやローラーブレードに足をいれることによって戦闘態勢を認識するようになっている。風車の建ち並ぶコミュニティの前を、雄一郎は東に、榊と井上は西へと旅立って行った。

そう言えば……農園第一期生の仲間だった尚人（?続・ベガへの祈り?参照）が、自衛官時代に盲腸で入院し、タイトルマッチの前日に見舞った病院がこの近くにあったなと雄一郎は思い出す。自衛隊病院ならおそらく地下もあるだろう、10瓶足らずになったトコログリアを使う機会があるのなら無駄にはすまい。雄一郎はかつて首都高速だった高架道を下りる。確かこの辺りのはずだが……人工の建造物のみに埋めつくされた都会だった。それらが崩壊し凍りついてしまった街は記憶と照らし合わすことさえままならない。微かな物音にも耳を澄ませながら周囲を探り、歩を進める。P300Aが身体に馴染み終えた雄一郎はプロボクサー時代よりも一層研ぎ澄まされた感覚が備わっていた。
なんだ、この感覚は……全ての神経が異常事態を感知し、全身の細胞がそれに備える。右手が背中のクロスボウへと伸びかけた時、氷壁が一斉に動き出した。
「動くなっ！　我々は陸上自衛隊中央即応集団だ。日本国民に発砲するつもりはない、武器を下ろせ」
氷壁に見えたのは真っ白の防寒衣に身を包んだ15名ほどの一団だった。フードを上げ、銃を構える兵士達に明確な敵意は感じられないが?交戦も辞さぬ?といった強い意思が感じられる。雄一郎はゆっくりと右手を戻し、抵抗する意思がないことを両手を上げて伝えた。
まだ自衛隊が存在していたのか——規模は？　政府はどうなっている？　何故、事態の収拾、生存者の救助に動かなかったんだ？
指揮官らしき兵士の指示でクロスボウと衛星電話のはいったバック

パックを奪われる。
「悪く思うな、君の身元が判明するまで拘束する。歩いてくれ」
後ろ手に拘束しようとする兵士が樹脂製の結束バンドを締め上げる音が聞こえる。雄一郎はされるがままにしていた。
「国家は機能しているんですか？　自衛隊が存在するのなら、何故生存者の救済に向かわないのです」
雄一郎は先ほど脳裏に浮かんだ疑問を指揮官と思しき兵士にぶつける。
「それが我々に与えられた任務ではないからだ。君の身元が確定するまでは捕虜として扱う、もう喋るな」
苦々しげにそう答えた指揮官は、その後、一切の問い掛けに口を開こうとはしなかった。

Feel the menace（脅威の予感）

《君がサイトだな、ご苦労だった。私は伊都淵貴之だ。少々、意識を探らせてもらうよ》

バサバサッと大きな羽音と共に杜都市のアークに舞い降りたサイトを伊都淵が出迎える。無言で意思疎通を図る伊都淵を、アークを出たカジが見つめていた。ものの数分でアークの記憶をコピーし終えた伊都淵がサイトに礼を告げる。

《助かったよ、ありがとう。丈君のところへ戻るんだろう？》

《エエ》

《食事と水を用意させよう》

《ウレシイワ、オナカペコペコナノ》

嘴を水桶に突っ込み、一掴みの肉片を咥えるとサイトは休む間もなく飛び立ってゆく。陽光が黄金色の翼を荘厳に輝かせていた。その姿が見えなくなると、カジは伊都淵に近づいて言った。

「どんな様子なんだ」

「とりあえず十州道のコミュニティは心配なさそうです」

続いてアークに向かって声を上げる。

「応援の準備はとりあえず保留だ、警戒レベルも3まで下げておこう」

「了解ですっ！」スタッフの声が返ってきた。

「奴等は死滅したのかね？」

中学生だった頃の正と寝食を共にしていたカジだ。心配になるのも当然だが、以前はそんな素振りなど決して見せることなどなかった。伊都淵にはカジが急に老け込んでしまったように感じられた。

「そうではありません。サイトの記憶に小銃を持った兵士の姿が見えました。記憶の前後は入れ替わりますが十州道に漂着していたのは手漕ぎボートが４隻、アークを襲ったのはそれに乗ってきたホモローチの第二世代だと考えて間違いないでしょう。そして――驚く

なかれ、砕氷船が停泊していました」
「兵士に砕氷船だと？　米軍なのか」
「いえ、あの船体は？しらせ？です」
「しらせ……海上自衛隊のかね」
「そうです、２０名程の兵士がアークを囲んだ第二世代の背後に回っていました。飛び立った後、サイトは銃声も耳にしていたそうです」
「そうか……船も船員もよく無事でいられたものだな」
「そうですね、詳細は本田君達からの報告を待ちましょう。サイトは北陸からずっと沿岸部を飛んでくれたようです。第二世代上陸の痕跡があったのは十州道だけ、警戒レベルを下げたのはそのためです」
「危機は去ったということだな」
「ええ、当面は――」
伊都淵の言葉はどこか歯切れが悪い。カジが問い質す。
「まだ、なにかあるのだな」

「誰かいるかー！」
第二世代を追い散らした白づくめの集団はアークの前まで進んできた。頭をすっぽり覆っていたフードを脱ぎ、ゴーグルを外したひとりがアークに向かって声を張り上げた。
「日本語だよ、おい！」
正が顔を輝かせる。音波発信装置の出力をマイクに切り替えて返事を送った。
「２６名の生存者が居ます、そちらは？」
「南極観測船しらせの海上自衛隊隊員１９名だ。私は清水三等海尉、一体なにが起こっている、あのバケモノどもはなんなんだ」
「いま開けます！　詳しい話は中で」
正、村山、新沼の三人は氷のシャッターを開けるべく管制室を飛び出して行った。

「さっきの人、自衛隊だって言ってましたよね？　政府が復活して救助活動が始まったんでしょうか？　なんだかあの兵隊さん、なんにも知らないみたいだったけど」

「しらせってのは南極観測船なんだよ、戦艦じゃない。基地に物資を運ぶための船だから乗組員の半分は民間人だ。おそらく航海中に９．０２に遭って、氷で身動きが取れなくなって、氷が溶け始めた今になってようやく日本に戻ってこれたのではないだろうか。だが、よく転覆も沈没もしなかったものだな」

「へーえ、村山さんって物知りなんですね。もしかしてプロ野球選手の前は自衛官だったとか？」

「ごく普通の銀行員だったよ」

　村山はふっと笑うような声を洩らす。

「新沼っ！　馬鹿言ってねえで、さっさと手え動かせっ」

　顔を真っ赤にしてハンドルを回す正から新沼に罵声が飛ぶ。ウィンチのハンドルに取り付いた三人は懸命にワイヤーを巻き上げていった。

ＢＬＢの行方

まさか、こんなところに……
十数キロの距離を徒歩で連れてこられた先に雄一郎は驚く、そこはかつて園遊会にも招かれた皇居跡だった。豊かに生い茂った木々はなぎ倒されたまま凍りつき、水量を湛えた堀はスケートリンクと変貌を遂げている。在りし日の荘厳な佇まいは見る影もない。東御苑があったはずの区域には地下から盛り上がるようにそびえ立つものがあった。
「あれはなんですか？」
睨むような目を向けただけで指揮官は何も応えようとはしない。雄一郎はよろけたふりをして建造物の外壁に触れる。ＢＬＢ（バイオ流体緩衝材）の脈動が伝わってきた。
各自治体に送られたはずの大量のＢＬＢはここに使われていたのか、いつの間にこんなものを……伊都淵が警告した危機を流言飛語と断じながら、送り先を偽ってまでＢＬＢを集めていたのは政府だったのだろうか？　その建造物は２１ヘクタールあると言われる東御苑跡のほぼ全域を占めている。
兵士が認識標をかざすと、内部から操作されたように分厚い扉が開いて行く。屈折ピラミッドの頂点を切り落としたような巨大な建造物にはいるよう、雄一郎は告げられた。

「馬鹿を言ってはいかん、地軸がずれるものか。しかも南極の座標だと？　そんな戯言を誰が信じるものかね。ここにも多くの科学者が居るが、誰ひとりとしてそんな荒唐無稽な説を唱えるものは居らん。単なる異常気象だよ」
９．０２発生時、沖縄の米軍基地視察からの帰途にあり、渋滞で都市高速上に居た、時の防衛大臣一松道彦。行動を共にしていた即応連隊の一個小隊はすんでのところで難を逃れていた。建造物の中

央に位置する大広間に通された雄一郎は、皇居で行われた園遊会に招かれた折り、一松を紹介されていたこともあって不審者の嫌疑は晴れた。さもなければ再び幽閉される身となっていたかもしれない。『芸は身を助く』とはよくいったものだ、雄一郎はそんな諺を思い出していた。

　ただ完全に警戒を解いたようでもないのか、その会見は兵士達に取り囲まれたまま行われ、どうにも『引っ立てられた』感は否めない。一松の左右には明らかに兵士とは思えぬ年齢の男達が数人立ち並んでいる。雄一郎はどの顔にも見覚えがあった。あまりテレビを観ない雄一郎だが報道番組で勿体ぶった発言をしている姿を記憶にとどめていたのだろう。或いは一松と同じく園遊会で見た顔なのかもしれない。所謂有識者といった連中のようだった。

「異常気象という語句からして『単なる』といえるものではないと思いますが——でしたら大臣は、白夜とオーロラについてどうお考えなのでしょう。なにを指として状況の判断をなさっておられるのです？　そもそも諸外国との通信は可能なのですか？　一度に地球全域を襲った異常気象とは、どのような種類のものだったのでしょう」

「それは、君……」

　右隣の列から白髪頭の男が歩み出て一松に耳打ちをする。（突っ撥ねなさい）雄一郎にはそう聞こえた。

「だからこそ、異常気象なのだよ」

　白髪頭の男はおそらく気象学者なのだろう。聴いたままを、さも我が意見のように口にする一松の顔に尊大さが滲む。

「状況をどうお考えでしょうと結構ですが、武装した自衛隊員が大臣の指揮下にあって何故生存者の救出に着手なさっておられないのでしょう」

　今度はすぐ左隣の男が耳打ちをする。（打ち合わせ通りの受け答えでどうぞ）

「衛星が使えるようになったのはつい最近なのでね、それまでは分

光解析システムも使えず、生存者の有無も所在もわからなかった。ここは一万人の収容が可能だ。これからが復興の本番だと我々は考えている」

「これから……ですか、それほど猶予があるとは思えませんが」

有識者の列に怪訝そうな表情が浮かぶ。

「どういう意味かね、勿体ぶらずにはっきり言いたまえ」

一松は苛立ちを隠そうともせずに言った。

「例のバケモノはご存知でしょうか？　十州道にあれの第二世代が上陸したようです」

兵士の間から「えっ」という声が洩れた。ホモローチの脅威が日本全土をあまねく蹂躙していたことを雄一郎はミーティングで知らされている。一松の左列から黒縁眼鏡の老人が耳打ちに近づく。（この男は十州道から来たわけではありません。推測の域を出ないかと――）重々しく頷いた一松は再び雄一郎に目線を戻した。

「君はそれを見たのかね？」

「いえ、十州道で生存者の捜索にあたっている仲間の報告を聞きました。その様子を伝えられた伊都淵さんが推測されたのです」

「そんなことだろうと思ったよ。困ったもんだな、その伊都淵という男も。彼は医療機器のセールスマンだったのだろう。ここに居られるのは全員が国立大学で教授職に就いておられた、若しくは現役の方々だ。素人が悪戯に市民の不安を煽るような発言をするのは感心せんな」

「ですが現実に9．02は起こりました。それにこの建物には伊都淵さんが開発したバイオ流体緩衝材が使われています。自治体による補強工事を装ってまで大量のＢＬＢを集めていたのは、このためだったのですね」

苦々しげな顔になった一松に別の男が近づいて耳打ちをする。まるで幼くして王位についた幼帝を奸計に長けた摂政が操っているようにも見える。自分の言葉は持ってないのか、こんな男に何故、誰もが従う。伊都淵の人となりも知らずに頭から否定しようとする姿

勢が雄一郎には許せなかった。
「地震の余地も百回言えば一度くらいは当たるものだよ。しかし、とことん目立ちたがりな男のようだな、その伊都淵という男は」
ＢＬＢへの言及に回答はなかった。一松のこめかみ辺りの血管が浮き上がってぴくぴく震え出す。防衛大臣を前にして遠慮会釈なく語る雄一郎が面白くないのだろう、一廉の人物を演じるのも楽ではないようだな――潮時だ、話すべきことは話した。と雄一郎は辞去を告げる。
「それでは私は出発します」
また違う男が慌てた様子で一松に歩み寄る。どうみても六十歳は下らない年齢に不釣合いな赤いセルフレームの眼鏡をかけている。
「あっ、君ぃ――」
背中を向け広間を出て行こうとする雄一郎を一松が呼び止めた。
「なんでしょう？」
「君は、そんな軽装でよく屋外で活動ができるもんだな」
「トコログリアはご存知ありませんか？　伊都渕さんがの鳴らした警鐘に応え、所教授が開発されたものです。広範囲の体温管理を意識下で行うことができます。命を取り止めた方々の多くは９．０２以前に接種されていました」
再び赤メガネが耳打ちをする。（傲慢な男ですが脳神経外科として世界的な権威です、生きているのならなんとしてもここへ）彼等の恣意的な言動には『国家にあらずば人にあらず』といった傲慢さが透けて見える。決して短気ではない雄一郎だったが、ついつい握る拳に力がこもってしまった。
「準備が整ったからには国家規模での復旧活動を始めたい。生存者の捜索及び保護もその活動に含まれる。そのトコログリアの接種を頼みたいのだ。所教授をここに保護したい。連絡はつけられるのかな」
二言目には『国家など当てにならん』を口にする所教授が、うんと言うはずがない。雄一郎はバックパックを降ろして薬瓶のはいっ

たパッケージを取り出す。
「残念ですが、ここでは所教授とは連絡がつきませんが、ここに九人分あります。必要量を知らせていただければ、後日手配します」
「君の言う通りだとすれば、生存者の捜索は一刻を争う。そこにあるだけでもいい、隊員に処置してやってはくれんかね。医学博士はおられるが、ご高齢なのでね」
「わかりました。医務室があれば案内して下さい。すぐ処置にかかります」
「それとだな、鈴木君」
　まだ何かあるのか、とでもいうように雄一郎が一松を振り返る。
「国家の機能が回復するまで、私は暫定的に?元首?と呼ばれることになっている。些か面映ゆくはあるが、内閣がない状況で?総理?もないだろうからな、以降はそう呼んでくれたまえ」
「わかりました」

Ｓｈａｒｐｎｅｓｓ（迫り来る船影）

《そうか、ご苦労さん。よくやってくれた》
　サイトの報告を受ける僕を、泰然法師と原田兄弟、中島・遠藤の真柴組、佐伯医師に派遣された乾さんと吉中さんの七名が興味深げな顔をして眺めている。なんでもありのこのご時世でもなければイヌワシと意思を交わすなど俄に信じられるものではないだろう。世界がまともになった時、この力は何かの役に立つのだろうか？　動物園の飼育係には適しているかもしれない。小学校教諭程度では意外と潰しが効かないものだ。
「で、どうだって？」
「第二世代の上陸は十州道のみ、それもおそらく海上自衛隊が制圧してくれるだろう」
「ばんざーいっ！」「やったー！」
　原田兄弟は無邪気にはしゃぐ。
「自衛隊が出動したのですか？　彼等は今までなにをしてたのです？　政府の機能が戻ったのなら——」
　抱いて当然の疑問を投げかける泰然法師を制して僕は答えた。
「十州道に停泊していた船体は？しらせ？だと思われます」
「南極観測船のですか？　それでは——」
「ええ、おそらく法師様の想像通りかと。東北のカリスマは通信に混入してくるノイズを確認してはいますが、国家が機能を取り戻したようには思えません。９．０２に襲われた時、高層建造物が密集した都市のダメージは計り知れないものがあったでしょう。通常国会の開催時期とも重なります。カリスマの警告を軽視していた彼等が——」
　泰然法師が僕の言葉を引き継いだ。
「生き残っている可能性は少ない、そうおっしゃる訳ですな」
「残念ながら、その通りです」

よしんば生き残った政治家がいたとして、この氷の世界でなんの役に立つだろう。法師様の希望を砕くようで申し訳なくはあったが、あらぬ期待は大きな落胆を招く。僕は思ったままを口にした。

「じゃあさあ、他にも海に出ていた船とかが戻ってくるんじゃないの？」

「しらせは砕氷船なんだよ。氷が溶け始めたとはいえ全ての航路が回復した訳じゃない。普通の船では無事でいたとしても戻ってこられる可能性は極めて低い。あの衝撃波だ、航海中だった船舶は転覆か沈没していると考えたほうがいいだろうな」

「なんだ、それ」

期待をもって訊ねてくる海地に、こんなことを言わねばならないのは心苦しくもあるが、海岸線を飛び、日本海側を偵察してきてくれたサイトの視覚記憶には、期待を（・）かけられる（・・・・・）一隻の船影も映ってはいなかった。

「とにかく、帰ってきた人々がいる。自衛官なら災害派遣にも慣れてるだろう、きっと国の再興の力になってくれるよ。僕達は僕達に与えられた仕事をこなす、そうだろ？」

サイトの視覚記憶を覗いた伊都淵さんなら既に気づいてるはずの脅威があった。報告に一喜一憂する彼等の前で、僕がそれを口にすることはできなかった。

「――これが東北のカリスマの推測です」

「まさか……」

村山の説明を聴き終えた清水三等海尉は呆然として次の句が出てこない。

「粉塵が空を覆っていた頃は、推測でしかなかったんですが――南極に精通した船乗りのあなた方なら、この白夜の意味をご存知のはずではないですか？」

「……氷に閉じ込められた我々が船を動かせるようになった時、船位測定に於いてもっとも頼りにすべきＧＰＳは使えず、星も見えな

かった。機器に依存しすぎていたせいもあるだろう。コンパスは狂い、トランシットだけを頼りに海図を辿るしかなかった我々の航海は雲を掴むようなものだった。海も陸地も氷に覆われ、目印となるべきものはなにもない。やむ無く停泊していれば黒い化物に襲われ、奴等が居なくなったと思えば今度はさっきの奴等があらわれる。乗組員の過半数を失ったよ、あれが中国人の成れの果てだとは……まさしく悪魔の所業だな」

記憶を辿るようにゆっくり、悪夢を拭い去ろうとはっきりとした口調で清水は答えた。

「あの連中はその第二世代だというのがカリスマの予測です。待ってて下さい」

衛星回線から伊都淵の声が聞こえてくる。正が状況の説明にあたっていた。

「——いやあ、命拾いしちゃったよ。しらせサマサマだ」

——やはり、しらせの乗組員だったか。サイトの視覚記憶は鮮明だった、奴等はホモローチの第二世代だと思って間違いないだろう。今のところ上陸があったのは、十州道だけのようだ。

「あれはカリスマなのか？」

清水が村山に訊ねる。

「ええ、お話になられますか？」

しばし考えた末に清水は言った。

「止めておこう、政府は彼を認めていない。非戦闘員も含め、我々は防衛省の指揮下にある」

「この期に及んで、あなた方はまだ政府のいうことを信用なさるんですか？　危機を訴えた伊都淵さんの意見を聞き入れていれば、これほど多くの人々が命を落とすこともなかったというのに。あなた方が守るべきは国民ですか、それとも政府なのですか！」

その言葉には温和な村山らしからぬ激しさがあった。

「それでも国家がある以上、我々は命令系統に従わねばならない。

船の燃料は尽きた。これより徒歩で暫定国家が設立された皇居跡へ

と向かう。非常時のみ使用を認められる特殊な周波数域に全自衛官召集の命令が下された」

　村山は驚きの声を上げた。

「暫定国家ですって？　政府に生存者が居たのですか？　あの衝撃波をどうやって……」

「無線機が壊れ、こちらから送信ができなかったため詳細はわからない」

「篠田さんを呼んでくれ」

　会話を見守っていた新沼は、村山に言われて居住区へ看護師を呼びに走る。

「助けていただいたお礼です。氷点下３０℃の屋外では移動するだけで命懸けとなることでしょう」

「それは？」

　清水は村山のつまみ上げた薬瓶を怪訝そうに眺めた。

「脳神経外科の権威所教授が開発されたトコログリアという薬品です。広範囲の体温調整を意識下で可能にします。投薬には激痛を伴いますが訓練を積まれたあなた方なら耐えられることでしょう。９．０２を生き延びた人々の９２パーセントが接種を完了していました。隊員の皆さん全員の分はありませんので、南に向かわれるなら杜都市のコミュニティに寄って下さい。こちらから連絡しておきます」

「しかし……」

「疑念はわかりますが私達を信じてください。これなしではあなた方は十州道さえ出られません」

　しばし考えた末に清水は決断を下す。

「わかった、船には民間人が十二名残っている。彼等をここで引き取ってやってくれないか？　本体に合流したら必ず連れに戻る」

「それは構いませんが、逃走したホモローチ第二世代が残っています。船に武器が残っているなら私達がお借りしてもいいでしょうか？」

「ああ、彼等を迎えに行ったら持ち帰るとしよう。氷の海に投げ出

されたり化物に襲わたりして八十名居た隊員の残りがこれだけだ。彼等の装備がそっくりそのまま残っているよ」

悲痛な顔で語った清水は、続いて村山を戦慄させる事実を告げる。

「奴等の船は海を埋め尽くすほどの数だった。大半は氷に行く手を閉ざされたり餓死したりでここにたどり着いてはいないが……」

「海を埋め尽くすって、まだそんなに居るのかよ」

驚嘆の声を上げる正に向かって清水が続ける。

「数百艘はあった。漂着したボートの数とさっきの奴等の数から判断すると、一艘当たり十体から十二体が乗っている計算になる。油断するな、好むと好まざるに関わらず生き残るためには銃の使い方を覚えてもらわねばならん」

Ｍｉｓｌｅａｄ（ミスリード）

「気味悪い奴等だな、それになんだこの臭いは……」

　十名の隊員が？しらせ？に向かい、残った隊員と共に異形の死骸を片付ける正がボヤく。強烈な悪臭を放つそれらはトランファー・ジェニックが骨格にまで影響を及ぼしたのか、指先に繊毛が密生した腕が随分と長くなっている。上半身が異様に発達しており、摩擦抵抗の少ない氷の上でもなければ引きずることもできなかっただろう。砂漠に駱駝が適応したように、この異形も食料の乏しい極寒地に適応したようで、ぺしゃんこになった腹部にはなんの消化物も残ってないように見える。長い期間をかけ海を渡ってこられたのは、身体の一部を栄養に変える機能をゴキブリの遺伝子から取り込んでいたからだろう。氷上に放出されたピンク色の体液は変色することもなくジワジワと染み込んでゆく。あまりの悪臭に気分を悪くする住民が続出したため、清水は火炎放射で死骸の山を焼くよう隊員に指示を出した。皮脂――獣脂と言うべきか、それが燃料となった狼煙は？しらせ？に向かった隊員達が戻るまで燃え続けていた。

　連れ戻った乗組員は十名、燃料の切れた船内でふたりが凍死していたと報告を受けた清水は、東の台地に向かって黙祷を捧げる。隊員も村山達もそれに倣った。犬橇に山と積まれた小銃と弾薬を使って射撃訓練が始まる。老人と子供を除く全員がそれに加わった。

「頭か胸を狙え。弾薬は６０００発ほどあるが、奴等の乗る船の半分しか着けなかったとしても充分とは言えない。セミオートで射つんだ」

　バラバラッと射撃音が上がり硝煙が香った。氷塊の上に置かれた空き缶を正確に撃ち落としていたのは正だった。

「うまいじゃないか、経験があるのか？」

「チャンプにはなれなかったけどモトクロスのレースで世界を転戦しててね、ストレス解消に射撃場に連れていってもらったことがあ

るんだ。これは反動が少なくて狙いやすいよ」
「そうか、本田君だったな。君が射手の指揮を取れ」
「了解っ！」
伏射の姿勢のまま片手を上げ、正が雑な敬礼を返す。清水は指導にあたっている隊員に続けるよう指示を出し、正の肩を叩いた。
「寒冷地用の小銃ではあるが、トラブルが起きないとは言えない。来い、分解を教えよう」

「目を瞑っていても分解組立ができるようになるまで繰り返せ。覚えるのではなく体得するんだ」
「もう覚えちゃったってば、マシンガンってこんな簡単にできてたんだな」
その言葉通り、正は清水を振り返りながらも手を休めることなく組立をしている。
「指も太く手先の不器用なロシア人用のものだからな。手袋をはめたままで分解組立ができるよう工夫がされている。射撃の腕前といい、君には適性があるようだ。しかし暑いな、ここは」
「体温を戻してないんじゃないの？　兵隊さんは体温調整に適性がないみたいだな」
言葉を飾らない正の直言が、額の汗を拭う清水に投げかけられる。
「そうだった……しかし凄いな、このトコログリアってのは。最初は半信半疑だったが、この極寒で生き残った人々が居た理由がよくわかった。どうして国はこれを採用しなかったのだろう」
体温の調整に成功した清水の額からすーっと汗が引いてゆく。
「トコログリアを接種すると、あっちのほうがダメになっちゃうって噂が立ったんだよ。アレが勃たないって噂が立つか……変な話だよな」
正が口にした冗談に清水が笑った。それは彼にとって９．０２以来、初めて見せる笑顔だった。
「例の赤いヤツは知ってるでしょ？　高速道路やトンネルに使われ

た流体緩衝材。あれに国家予算を投じてまで採用しておきながら、所教授が開発したこれには知らんぷり。いいたかないけど、この国の施策には方向性ってものが全く見えてこないぜ。まあ二年毎にトップが代わってちゃあ無理もないだろうけど」

空になった薬瓶には獣脂がいれられている。それを摘んで語る正に、自身を責められた訳ではないが清水の顔に苦渋が滲んだ。

「村山君を呼んでくれ、そろそろ出発せねばならない」

「わかった」

レシーバカバーをはめクリーニングロッドを射し込むと、正は銃を置いて屋外に向かった。

「気持ちはありがたいが、君達の分がなくなるのではないか」

「外で活動できれば私達に食料の補給は可能です。それに慣れていないあなた方です。荷物になるかもしれませんが持っていって下さい」

村山は大きなリュックに詰められた食料を隊員のふたりに手渡す。

「そうか、では遠慮なく。乗組員を頼む」

受け取るべきか否か戸惑っていた隊員は、清水の言葉に嬉しそうにリュックを担いだ。

「ええ、いつかきっと生きてまた逢いましょう。必ず杜都市のアークに寄って未処置の隊員の方々にトコログリアの接種をなさって下さい」

清水は正式な敬礼で村山に答える。全ての隊員にトコログリアは行き渡っておらず、ここから本州に渡るだけでも３００ｋｍ近い距離がある。村山は隊員のひとりひとりと固い握手を交わしながら、祈るような気持ちで彼等の無事を願っていた。

「そうだったんですか、では、あのノイズも？」

――多分その暫定国家が発信した緊急招集だったんだろう。本田君達が逢った自衛隊員の話とも合致する。急いで戻ってもらう必要は

ないが、君か丈君に頼みたい仕事がある。
「処置が終わり次第、そちらに向かいます。トコログリアの増産を急いでください。ここには未接種者が二百名近くいます」
――わかった。処置を済ませた連中を君が何人か連れて戻って来い、彼等に渡すようにしよう。
「了解しました。では」
『トコログリアを接種する隊員を選抜するまで待て』と言われた雄一郎は手短に伊都淵との通信を終えた。正も村山さんも無事だったか、よかった――伝え聞いた状況に安堵する『自分は衛生科の隊員だった』と言う若い関谷一等陸曹に医務室へと案内される。医療に明るくない雄一郎にとって、どの機器がどんな用途に使われるのはわからなくとも、大病院のような設備が整った医務室に息を洩らした。これだけの施設と二百名からの人員があって、衛星が使えないというだけの理由で生存者の捜索に着手しなかったのか――暫定国家に対する疑問が彼の内で高まる。
「関谷さんも即応連隊の所属なんですか？」
「いえ、自分は隊の病院で研修中を受けておりました。地下に避難したものの、どことも連絡がつかず、しびれを切らして出ていった隊員は戻ってきませんでした。きっと、あのバケモノの餌食になったか凍死したかで……」
「これの処置が終われば少なくとも凍死の心配は遠ざけられます。第二世代にも銃撃は有効だと報告を受けました。弔い合戦の後方支援は君達が……」
顔を上げ、雄一郎を見返す関谷の虹彩が青紫に光った。
「君は……」
「バレちゃいましたね。自分は臆病なもんで……。上官は『あんなものはまやかしだ』と言ってましたが、こっそり指定病院に行ってトコログリアの接種を受けていたんです。隊の病院地下で生き残れたのは自分ともう一名。そいつは、運ばれる途中で死にました。同期だったんです、上官の叱責を恐れず、あいつにも接種を勧めてい

れば……」
　唇を噛み締める関谷の顔が悲痛に歪んだ。
「そうだったんですか」
「ここの存在を知らされていれば、体力のあるうちに避難することも可能だったでしょう。最初からここを目指したのは、だい……元首と即応集団の一個小隊、先導車に乗っていた警官隊、ここで地磁気異常を研究していた科学者達以外は、あちこちの駐屯地から助け出された自分と同じような境遇の者ばかりです」
　関谷の口調には悔しさと共に暫定国家への疑念が混ざっているように思えた。医務室に案内される途中、雄一郎は、この国が置かれた状況とはいかにも不釣合いな、薄着で長い爪を飾り立てた女性達を見かけていた。それについて訊ねる。
「さっきの若い女性達も自衛官なのですか？」
「科学者達が連れ込んでいたようです。外では餓えと寒さで人がバタバタと死んで行く――いまや死んで行く者も少なくなったことでしょうね。なのに、彼等の言い分はこうです。『国家を立て直すのは次の世代だ、そのために我々が出来ることは優れた遺伝子を後世に残すことである』と……笑っちゃいますよね」
　選民思想だ――あの黒田や高橋と何ら変わらないではないか。命を賭してまで招集に応えようとする兵士達は、これをわかっているのだろうか。あの尊大な一松と科学者達に、明日を信じてコミュニティを立ち上げ、助け合い、生き抜いて行こうとする人々を導く器量があるのか。雄一郎は処置の準備に意識を集中することで憤りを紛らわそうとしていた。

最初に医務室にはいってきたのは雄一郎をここに連れてきた小隊の指揮官、相良二等陸尉だった。四十歳前後だろうか、身のこなしと物腰からもう少し若い男を想像していたが、短く刈り込まれた頭髪にはかなりの白髪が混じっており、眉間に深く刻まれた皺に強固な意思を感じさせる。？どんな状況に於いても任務の遂行が最優先、譲歩は敗北に等しい。我こそは叩き上げの兵士なり？といった融通の利かなさをその表情に貼り付ける様は、どこかボクシングの師であるカジを思い起こさせた。

「これを」

雄一郎が差し出すマウスピースを見た相良は怪訝な顔で聞き返す。

「なんだ、それは」

「薬効成分が浸透する過程では激しい痛みを伴います。これを噛んで耐えてください」

「そんなものは要らん！」

「では始めます」

麻酔なしでの処置に手馴れてきた雄一郎だった、カテーテルの挿入で顔をしかめる被処置者に痛覚の弱まる地点がある。そこで僅かに手首を返した場所が噴霧ポイントとなっていた。処置台の端を強く握る相良の拳が白くなる。表情が緩んだのを確かめプランジャーロッドを押し込んでいった。

陸上自衛隊中央即応集団か……設立の理念は国際平和協力活動だったのが、いつしかテロ対策の特殊部隊となり、９．０２直近には、幾度となく首の挿げ替えが行われた内閣に於いて例外的に長期政権を保っていた一松防衛大臣の施設軍隊みたいなものとなっていたと聞く。被災時に行動を共にしていたこともそれを裏付けていた。

「終わりました」

痛みに潤ませた目を恥じるように、相良は雄一郎から顔を背けて

処置台を降りる。
「施術をしっかり覚えろ」
強い口調で関谷に告げると、さっさと医務室を出て行く。入れ替わりにはいってきたのは三十代半ばの隊員だった。どの隊員も判で押したようにマウスピースを拒み、ひとりが出てゆくとまたひとりがはいってくる。それは全ての薬瓶が空になるまで繰り返された。最後のひとりは、一松とロマンスグレーをきっちり七三に分けた男を伴ってはいってくる。先ほど一松の右隣に居た男だ。目付きの鋭さから科学者ではなく、おそらく警察関係だろうと雄一郎は踏んでいた。
「ご苦労さん、順調のようだな。施術を見学させてもらってもいいかな？　こちらは警察庁長官の真壁君だ」
「どうぞ。私の持ち合わせはこれでなくなります。先ほど杜都市のコミュニティに増産を急ぐよう伝えておきました。処置を済まされた隊員の方に同道していただければ、どこかで待ち合わせて皆さんの分のトコログリアをお渡しできると思います」
雄一郎の提案に同意するでもなく、ふむと唸っただけの一松だったが、最後の隊員への処置を関谷にたくそうとすると咎めるような声を上げる。
「隊員は貴重な戦力だ、間違いがあってはならん。最後まで鈴木君が処置をしてくれたまえ」
「しかし、二尉は自分にしっかり施術を覚えろと……」
関谷の反論を真壁が抑え込む。
「元首の指示に一兵卒が口答えするのか！」
「……いえ」
項垂れてカテーテルを返す関谷からそれを受け取ると、雄一郎は九瓶目の投与を終えて大きな息を洩らした。
「終了です」
雄一郎が言い終わらないうちに医務室のドアが開いて警官隊――私服であったため推測だが――が飛び込んできた。警官隊の生存者

が居ることは関谷から聞かされていた。彼等が手にする小ぶりな自動拳銃から、雄一郎はそう推測する。
「何事ですか、これは」
真壁が歩み出て言った。
「無資格医療行為は傷害罪に当たる。鈴木雄一郎、君を逮捕する」
「しかしこれは、だい……元首の依頼ではないですか」
「そんなことは言っておらん、誰かそんな発言を記憶しておるかね？」
雄一郎は素早く関谷に顔を振る。しかし、彼は無念そうに俯くだけだった。
嵌められたか――しかしなんのために俺を？　一度は返されたバックパックとクロスボウを再び奪われる。拘束こそされなかったが、長い階段を下って鉄格子の部屋へと押し込められた。ガチャリ、と連れてきた警察官が施錠をする音が寒々とした部屋に響く。
二度目か、これでは危機管理が甘いといわれても仕方ないな、丈に偉そうなことは言えない。刑務所のような簡易寝台に腰をおろし、雄一郎は深くため息をついた。そして思い直したように部屋を見回す。窓はない。ステンレス製らしい格子を握ってみる。曲げることは可能だったが引きちぎるとなると関節が力を逃がしてしまうかもしれない。銃を持った見張りも居る、簡単には行かないだろう。
雄一郎は世界タイトルを奪取した試合を思い出していた。長期政権を誇っていたベネズエラのチャンピオンは、ランキングの低い頃から雄一郎の才能に怯え、タイトル戦のオファーに応じようとしなかった。ランキング一位、指名挑戦者となった雄一郎の挑戦を拒めずに迎えた試合、チャンピオンはアウトボクシングに徹した。長いリーチを巧みに利用して距離を詰めさせず、左の打ち分けにも右のガードの上げ下げで完璧に対応していた。ポイントアウトを狙うチャンピオンに、雄一郎は自陣営に戦略の変更を提案した。それまで無言で試合を見守っていたカジが言った。『スタイルを変えるな、ガードの上からでも奴のリバーを叩き続けろ。あの右腕を見ろ、真

っ赤になっている。そのうち反応速度は落ちる、その時がチャンスだ』６ラウンドをにはいった辺りから明らかにチャンピオンのガードを上げる速度が鈍ってきた。そこへ雄一郎の渾身の左フックがテンプルをとらえる。７ラウンド０分２秒、緑のチャンピオンベルトはその持ち主を一瞬で変えていた。

脱出のチャンスは必ずある。焦るな、じっくり考えるんだ。雄一郎は簡易寝台に身体を投げ出した。

「行かない訳にはいかないよな」

「そうだな、燃やしたのが３１体あったら２０体前後が逃げ出した計算になる。他のコミュニティが襲われたら大変だ。清水海尉が置いていってくれた武器を分配しておかなければ」

「留守はどうする？」

正に普段の軽い調子はない。村山の引き算が、さらなるホモローチ第二世代上陸の可能性を無視したものであることをよく理解していた。

「新沼君に頑張ってもらうしかないだろうな、たった３０分ほどだが住民は射撃訓練も受けている。我々が出掛ける前に食料を探してきて備蓄を増やし、防護壁を下ろして立て篭っていてもらおう」

「我々って……たったふたりだぜ？　それで２０体を相手にするのか、キツイな」

「小野木君はたったひとりで６０体近くのホモローチに囲まれて生き延びたそうだ。しかも丸腰で。同じ人間である我々だ、銃もある。それに奴等が必ず襲ってくるとは限らんさ」

村山は正の肩をポンと叩いて笑顔を作る。ただ、自分自身の言葉が希望的観測であることもよく理解していた。大陸から飲まず食わずで渡ってきた第二世代の目的は明確だった。

「タケ坊か、あいつは普通の人間じゃないぜ」

杜都市のコミュニティで顔を合わせていた村山だ。熊や犬と話す丈が伊都淵に近いものを持っていることは承知している。

「それでも、あの若さだ。長い一人旅や自分の変化に耐えるのはたいへんだったはずだ」
「まあね、ところで村さんの腕はどうなん？　こう、１６０ｋｍ／ｈを超える剛速球で向かってくるホモローチを薙ぎ倒すなんて芸当はもう無理なん？」
「わからん。あれ以来、ボールも握ってはいないからな。だが自己暗示という魔法は解けた。今はこいつに頑張ってもらうしかない」
　自動小銃を掲げる村山に頷いて正は立ち上がる。
「今夜の定時連絡で行動予定を報告、出発は明日早朝、だな。住民のみんなの食い扶持に負担をかけないで済むように食料を探してくるよ」
「頼む」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9756z/

エウロパの旅人ー建国篇

2012年1月14日06時55分発行